

取組の概要

対象畜種

豚

協議会構成員

養豚農家（畜産農家）、稲作生産組織（耕種農家）、農業協同組合、飼料用米利活用業者
〔オブザーバー〕 市、県地域機関

飼料用米生産面積

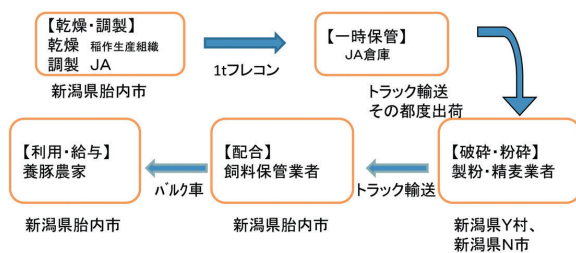
2.6ha

供試品種

ふくひびき 2.3ha
関東飼226号 0.3ha

取組内容

① 飼料用米の流通、保管、調製に係る実証調査



- ◆ 主食用米との区分を図るため、生産者は組織に限定した栽培。
- ◆ 収穫物はJA倉庫に全量集荷
- ◆ JA倉庫から破碎・粉碎業者までの移送は、飼料用米利活用業者の手配により確保し実施。

② 飼料用米の給与による家畜・畜産物への影響調査
(畜産物の成分分析を含む)

試験設計：主に配合飼料に10%配合。肥育豚に対して
おおむね135日齢から出荷まで給与。
調査項目：脂肪酸組成、融点、水分、粗脂肪、

肉質検査（保水性、伸展率、ドリップ量、pH、肉色）

官能検査

調査結果：肉質分析により、飼料用米を給与したほうが、オレイン酸割合が増加し、リノール酸割合が減少した。

官能検査では、パネラー11名の評価として、飼料用米給与豚が若干優れていた。

取組によってわかったこと

1. 調製・保管・流通について、次のことがわかりました。

- 当初、玄米給与で考えていたが、消化率を考慮して、粉碎処理を実施したため、粉碎、輸送経費が発生した。
- 今回は、粉碎業者の厚意により安価となったが、助成がないと飼料用米の利用拡大は難しいと感じた。
- 一年を通じての供給となることから、夏場の保管管理の徹底が必要だと思われた。

2. 家畜・畜産物への影響について、次のことがわかりました。

- 飼料米給与では、若干肥育期間が延長する傾向にあった。今後は、混合割合、給与時期等の再検討が必要であると思われた。
- 飼料米給与期間において、食い込み量が低下する豚は観察されなかったと感じた。
- 食味試験を実施したところ、参加者からは、飼料米給与豚がおいしいとの意見が出された。
- 脂肪色がやや白くなった。（脂肪融点が低下した感じがするとの声があります）
- 飼料米を給与するとオレイン酸が増加する一方でリノール酸がやや低下した。

3. 今後の飼料用米の取組予定などについて

- 耕種農家サイドの生産メリットが見出せないことと、給与した畜産物の有利販売が非常に難しいことなどから、残念ながら21年度は取り組む予定はありません。
- 今後、飼料用米を給与する畜産農家のメリットも含め、耕種農家サイドの水田フル活用の観点から、生産現場で有効な手段の構築が必要であると思われます。

胎内市飼料用米利用協議会 事務局 (JA)

参考データ・写真等

1 飼料用米栽培適応調査

品種名	作付面積	栽培方法	収穫期	総玄米生産量	10 a 当たり収量
ふくひびき	228 a	移植栽培	9/15	16,368kg	717kg
関東飼226号	34 a	移植栽培	10/5	915kg	269kg
計	262 a			17,283kg	659kg

2 流通経費調査

実証調査 玄米重量	経 費 (円)						kg当たり 単価
	乾燥	調製	保管	輸送	粉砕	合計	
17,283kg	181,469	217,765	42,017	168,000	80,105	689,356	39.88円

3 肉質分析調査(脂肪酸組成)

	オレイン酸	リノール酸	飽和脂肪酸	不飽和脂肪酸
実証区	41.37	7.53	47.48	52.52
対照区	40.08	8.72	47.92	52.09



ふくひびき成熟期の状況



飼料用米の破碎状況 (配合飼料に混合して給与)